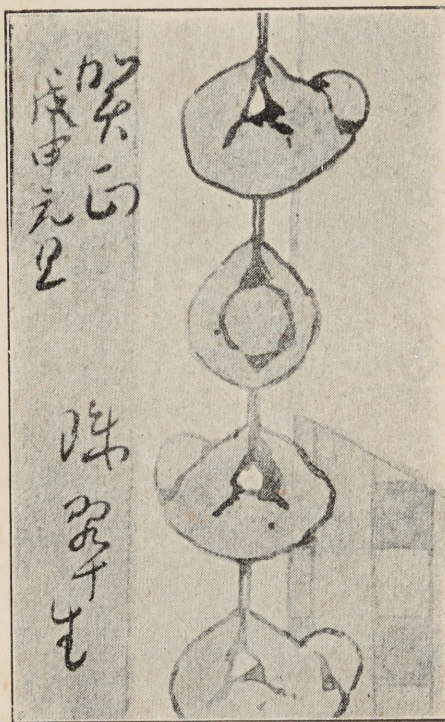


△ △ △

何も日本人が小國に生息してゐるからと云つて、大なる製作が出来ないといふ理屈はない。狭小な範圍にあつてはよし大小の比較をする事は出来ないにしても、猫の頭からだつて大空に見える、日本の風景畫家として爲すべき事はいくらでも有りあまる。單に西洋人の眞似ばかりして居る必要はない。ものゝ大きい感しを興へるとか優美な感じを見せるとか、清楚なもの瀟洒なもの、何れの方面を描出したからとてどれが一番好いと云ふ事は云はれぬ。何れにしても當初描かんとした目的をさへ違すれば、それで立派な美術品と稱してよからうと思ふ。日本の畫家で能く西洋に行きよる人、又自身は行かずとも、洋行者の談話、彼の地の雜誌などで、西洋の繪畫に親しんでゐる人の中には、切りに西洋的の景色や圖柄を搜し廻り、ありもせんものを無闇にさがしたてゝ、無理にこじつけて畫を作る、あれは實に無理な注文で。また其の人のためにも不得策であつて、到底成功は覺えない。それよりは能く自分の國を知り、能く自己の性質を知る事が最も大切であらうと思ふ。

(吉田博氏、「寫生旅行」の一節)



筆 紫 珠 雲 津

△ △ △

山の非下界的、非人間的に見ゆるは、單に其高距と形態とのみに因るにあらず、一はその秘色にも歸し得べし、高きが故に雪を被りて白なり、白は本源の明、何の染習をも受けず、故に潔し、故に駿河の富士も、加賀の白山も、『望之如太白』といはれたる台灣の玉山(新高山)もアルプスの白山も、西藏の雪山も、皆崇拜せらる、高潔にして神性ありと思惟せらるればなり、

その雪なくして「白山」なる能はざるときも猶「青山」なるを失はず、青色か陰性、もしくは寒性のものにして、沈黙の氣象ある、近づかむよりも避けむとす、高山を遠望すれば、彼は我を遠ざからむとするも、我は何となく彼に吸引せらる、その青に一分の暖色なる紅を加ふれば、紫となる、文人に山紫水明の語あり、紫の輝くところ、人心に安住ありと雖も、

竟に是れ人間の現在色にあらず、必ずしも紫衣の僧や、紫雲たなびくといふ類を連想するにあらずと雖も白の神仙的なるが如く、青の隱逸的なるが如く、紫もまた出世間的也、しかし高て山は一個にして、皆之を具有せり。(小島鳥水氏、『甲斐山岳の形態美』の一節)